

# 身延山における日蓮聖人

—弘安元年を中心として—

上 田 本 昌

## 一 建治四年（正月から二月まで）

身延へ入山されてから五年目、建治四年（一二七八）は、二月二十九日に「弘安」と改元されている。この年は正月から建仁寺が焼失したり、五月には叡山の僧徒が、三井寺の長吏隆辨の鹿谷坊に火を放つなどの事件が起き、又一方世間では疫病が流行して犠牲者が続出し、改元の一因となるなど、仏教界も世間も共に波乱の多い一年であった。

西谷において五十七才を迎えた宗祖は、身延在山九年間のちょうど中期に当たっている。この年は『実相寺御書』を始めとして、五十六篇の執筆があり、在山中で最も、落付いて筆を執られた一時期であったと考えられる。先ず正月十六日付の『実相寺御書』は、「駿河国実相寺豊前公御房御返事」とある如く、日源へ宛て出された消息文である。それによると、実相寺の住侶で尾張阿闍梨と云う者が、『法華玄義』第四卷に涅槃經の文を引用し、「以小乗破大乘、以大乗破小乗、盲目因也」と曲釈したことについて反論し、「先以実破權絶權執入実者釈迦・多宝・十方諸仏常儀也」と述べ、彼の言の如く実教をもって權教を破する者は、盲目であるとすなれば、釈尊を始め、天台・伝教も皆盲目の人と云うことになるであろうと反詰している。又実相寺の支院たる四十九院の人々が、宗祖の説に帰したことを怒った同寺の別当等についてもふれている。この頃、岩本周辺では、宗祖の説に従う者と、これを阻

止しようとする実相寺の一派とが、次第に抗争を激しくして行った様子をこの一文からも読みとることができる。<sup>②</sup>

駿河特に富士の周辺には、上野・松野・西山・高橋等有力な檀越が、次第に活発な信行を進め、教団としての組織も基盤が築かれて行きつつあったようである。これに比例して一方では隣接の真言宗滝泉寺の学僧らに刺激を与えて行く結果となり、やがて一年後に起る八加島熱原法難<sup>③</sup>への、導火線としてのつながりを持って行ったものと考えられるのである。「日本国の人にはくまれ候ぬ。みちふみわくる人も候はぬに、をもいもよらせ給ひての御心ざし、石の中の火のごとし。火の中の蓮のごとし。ありがたし、ありがたし。恐々。」<sup>③</sup>これは正月二十一日付の松野尼御前に宛た御返事であるが、さすが正月頃ともなると寒風豪雪にはばまれ、訪れる人も希れなことであつたろう。「日本国の人」にはにくまれて、山中での孤独感を味っていると云う人間的一面が窺える。これは後に五月、長雨の続いた時も同様の状態であつた。

次に正月二十五日には、四条金吾に宛た書簡がある。「法華経にあらざれば仏になる道なかりけるか」<sup>④</sup>とあり、主君江馬との間の勘気もとけて、再び出仕できるようになったことを悦ぶと同時に、一層身辺に気を配って注意するよう、細かな点に至るまで指示を与えている。<sup>⑤</sup>西谷に在りながら、鎌倉の檀越の行動について、詳細にわたる身の処し方の教示に、異常なまでの師弟愛が溢れていることを感じとることができる。

二月に入つて十三日には、『松野殿御返事』がある。「種々物送給候畢。山中のすまゐ思遣せ給ふて、雪の中ふみ分けて御訪ひ候事、御志定めて法華経十羅刹も知食し候覧」<sup>⑥</sup>西谷の一月・二月は、雪も深く閑寂とした日々であつたようである。また「去年の春より今年の二月中旬まで疫病国に充滿す。十家に五家、百家に五十家、皆やみ死し、或は身はやまねども心は大苦に値へり」とあるによつてもわかる如く、流行病に見舞われ、国内は混乱していたよう

である。このことはすでに『立正安国論』で記した通りであるが、国主が用いないため、「此国既に謗法と成りぬ」と説き、勸持品の「経文かたがた符合し候了んぬ」<sup>⑦</sup>と述べている。即ち疫病を法華経の行者を軽しめ、謗法を犯した罪によるものであるとしているのである。宗祖にとって△経文符合△は、「行者」として又「末法の導師」としての不可欠の条件であったとみることができよう。

二月二十三日には『三沢鈔』が著されている。これは駿河の三沢小次郎が柑子・昆布・海苔・於胡などの食糧品を届けたのと、内房の尼から小袖が送られて来たことに對する礼状であるが、法門の解説が正文をなしている。中でも「又法門の事は佐渡の国へながされ候し已前の法門は、ただ仏の爾前の経とをぼしめせ。」<sup>⑧</sup>とあり、宗祖一代の法門について佐前と佐後に分け、佐前をもって仏一代の説法における爾前迹門と同様であるとし、佐後の法門をもって本門正宗分に比するのであり、佐後の法門を最も重要視する典拠とされている。尚、『高祖年譜』によると、三月十九日から、五月にかけて講筵を開き、弟子の日向がこれを筆録して、『日向記』ができ上ったと記している。<sup>⑩</sup>「又うつぶさの御事は御としよらせ給ひて御わたりありし、痛しくをもひまいらせ候しかども、氏神へ参りてあるついでと候しかば、見参に入るならば定めて罪ふかかるべし」<sup>⑪</sup>とあって、内房の尼が、尼の身でありながら神（所従）を先きにし、法華経（主君）を後のついでとしたことを指摘し、切角ではあったが見参せずにかえしたことを述べ、信仰における筋道を正した態度が示されている。尚、この尼の他にも下部の温泉の「ついで」と云って来た者たちも、皆追返したことが記されている。この頃すでに下部の温泉の△ついで△参り△が△あったことがわかり、興味深い。宗祖は信仰における本末顛倒を厳しく誡ましめているが、これは今日のわれわれにとっても、注意すべきことである。僧尼の身でありながら、先ず下部の温泉にひたって、翌日身延詣をなすが如きは、「定めて罪ふかかるべし」であり、宗祖の

訓誠に反する輩であることは言を待たない。

二日後の二十五日には、上野殿から、鴉いもろぢら・串柿・焼米・栗・たかな(筈)・すづつ(酢筒)等が送られて来てゐる。その礼状に阿育大王の故事を挙げて、法華經供養の功德を述べてゐる。「抑も今の時、法華經を信ずる人あり。或は火のごとく信ずる人もあり。或は水のごとく信ずる人もあり。聽聞する時は燃立つばかりをもへども、とをざかりぬればすつる心あり。水のごとくと申すはいつもたいせず信ずる也。此はいかなる時もつねにたいせずとわせ給へば、水のごとく信ぜさせ給へる歟。たうとしたうとし。」<sup>⑫</sup>と信仰における火と水の信を挙げ、一時的火の信よりも、常に退せず持続する水の信を勧めてゐる。身延における晩年の宗祖は、全く自身がこうした入水の信を保持し、門下に対してはその範を示されたものと云えよう。身延入山以前の宗祖は、特に佐渡時代以前にあっては、折伏逆化の火を燃え立たせ、謗法の徒に対して猛火を浴びせて来たが、西谷に在っては、ひたすら入水の信を満々とたぎらせ専ら文筆による教化へと移行していったと見ることもできよう。

二月二十八日には、富木殿から悲母三回忌の御供養として、青兎七結が送られて来た。これに対し『始聞仏乘義』を著して与えられている。この一抄は章安大師が円頓止觀について論じた『止觀明靜前代未聞』について述べ、法華經による即身成仏説に及んでいるのである。末文に「末代凡夫聞此法門唯我一人非成仏父母又即身成仏。此第一孝養也。」とあって、法華の法門によること、わが身にとつても、孝養をなす上にも第一であると示している。又そのあとに「為病身之故不委細。又々可申。」とあるので、この頃宗祖は病身であり、思うように筆を執ることが困難であつたようである。身延入山当初の宗祖は、健康であつたが、次第に病を発して、この頃から病のために床へ着かれる機会が、増えていったようである。又世間一般でもこの頃、しきりに疫病が続き、この一抄の著された

翌日（二十九日）には、ついに弘安 $\vee$ と改元<sup>⑭</sup>されるに至っているのである。

## 二 弘安元年の春（三月から四月まで）

かくして建治四年二月二十九日に、弘安元年と改元されていった。この頃宗祖は『立正安国論』の弘本 $\vee$ を書き遺されている。「沙門日蓮勤」と著名されており、真蹟は京都本国寺にあり、古来「本国寺本」と称されている。西谷では安国論の講義も又併せておこなわれたことであろう。

さて、弘安元年三月廿一日付で『諸人御返事』がある。真蹟三紙の短文であるが、「日蓮一生之間、祈請<sup>ニ</sup>所願<sup>ニ</sup>忽令<sup>ニ</sup>成就<sup>ニ</sup>歟。」とあり、真言・禅等の諸宗らと公場対決が開かれそうな情報が到来したものの如くである。安国論以来、宗祖にとって公場での対決は、一生の念願であったから、こうした情報には大いに悦ばれたことであろう。三月十九日の使者が二十一日にこの知らせを持って身延へ到着している。その当時、鎌倉から身延までを三日間で走るには、余程の急用であり重要な意味を持った便りであったにちがいない。身延へ入山されたとはいえ、機会あらば公場での対決に、「是非ヲ決スル」ため、いつでも弟子を代理として指し向ける用意のあったことがわかる。むしろこの機の熟するのを待ち、期するところがあつたのではないかと考えられる。「一閻浮提皆仰<sup>カ</sup>此法門<sup>ニ</sup>」日の来ることを目し身は山中に在れども、常に此の壮志を抱かれていたことには、変りのなかつたことが知られる。

又この同じ日に三位阿闍梨御房に宛た『教行証御書』がある。この書は三位房が公場対決に向う場合の注意すべき事項が示されている。法門の内容から始り、終りには身口意にわたって謹しむべきことを教えられている。恐らくは宗祖に代つて公場対決に向う三位房に対し、詳細な配慮がなされたものと考えられる。「日蓮が弟子等は憶病にては不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>レ<sup>⑮</sup>」と云う激励も見られ、更に「いかなる主上女院の御意たりと云へども、出<sup>ル</sup>三山内<sup>ニ</sup>、諸宗の学者に法門あるべ

からざる由仰せ候」とあるのを見てわかる如く、宗祖自身は山を下ることをせず、あくまでも弟子に宗論を行わせしめるつもりでいたことがわかる。一旦入山したからには一定期間の来るまでは、決して山を下らないとする決意の堅固さが窺える。この点は『報恩抄』における道普房遷化の場合も同様である。教・行・証の三について法華経と諸経とを比較して論じているが、宗論を前提とした筆の運びとなっている。

四月に入ると一日に富士上野の南条七郎次郎時光から、白米一斗・いも一駄・こんにやく五枚等の食糧品が届けられている。<sup>⑰</sup>その御礼状によると、「石河の兵衛入道殿のひめ御前」に関する記述が見られる。この姫については異説も多いが、富士重須の地頭であった石川孫三郎源能忠の父の姫であったとも伝えられている。この姫が病弱にして臨終に当り、唱題したことを賞し更に「今、末法に入りぬれば余経も法華経もせんなし。但南無妙法蓮華経なるべし。」<sup>⑱</sup>とあって、△唱題正行▽を主張している。ただ余経については問題はないとしても、法華経についても「詮なし」とされたのは、妙法五字をもって法華経の肝心となし、△一大秘法▽とし、究極の法門として扱ったのであるから、当然とも考えられうる。しかし、宗祖の本志としては、△助行▽としての法華経読誦を、全面的に否定されるものではないと考えられる。『開目抄』にも寿量品の重要性が強調されており、<sup>⑲</sup>西谷に在っても常に宗祖自身が、△法華経一部▽を読誦・解説されていたことによっても背けようし、更にこの御書は姫が平素病弱であったので臨終に際し、ひたすら△唱題正行▽のみをもって、他を一応「詮なし」とされたものと考えられる。右の祖文から直に△助行▽の法華経読誦を否定するものであると考えることは、いささか早計と云うべきであろう。

四月十一日には『檀越某御返事』が記されている。真蹟四紙であるが誰れに宛た御書か判然としない。古来四条金吾宛の書簡とみなされているが、真蹟には宛名が記入されていない。此の頃又△日蓮流罪▽の噂が流れ、これを身延

へ知らせてよこした文の御返事である。「もしその儀候わば、用ひて候はんには百千万億倍のさいわいなり。」と泰然とした態度でこれを受け流している。過去の△色説▽に照して、諸天の守護に確信を持ち、△法華經を行ずる者▽としての絶対的信に根ざした者の言葉として解することができよう。更に「御みやづかい(仕官)を法華經とをほしめせ」と述べ、△行者▽の諸作即法華經の修行なりとみなしている。

この頃、是日尼の入道が来て、一か月にわたり「菜を摘み、水汲み、薪こり」をし給仕奉公したことが『是日尼御書』に記されている。<sup>②1</sup>此の書は真蹟二紙の断片であるため、前半が伝っていない。従って全編を通しての趣意はつかめ難いが、「さどの國より此甲州まで入道の来りたりしかば」とあるので、佐渡の住人であつたらうことがわかる。

続いて四月二十三日には、太田左衛門尉が十八日付で発した書状が到着している。この書状には御布施として「鳥目十貫文・太刀一・五明一本・焼香廿兩」が付けられていた。乗明が五十七才で「大危の年歟」と考えられ、身心に苦勞の多いところから、除災のための祈願をこめた御布施と見ることができよう。本迹兩門の肝心たる方便・寿盃の二品を書写されて「相構<sup>ハ</sup>相構<sup>ヘ</sup>不<sup>レ</sup>離<sup>ニ</sup>御身<sup>ヲ</sup>重<sup>ネ</sup>ねつみて御所持可<sup>レ</sup>有<sup>者</sup>也<sup>②2</sup>」と△御守▽につかわざられている。この場合は法華經の肝要なることを特に強張しており、先の四月一日付で記された石河兵衛入道殿のひめ御前に示された「法華經も詮なし」と云う文と比較して見る時、極めて対照的な御書と云えよう。

次に、同じく四月の作として清澄の浄顯・義浄の二房に宛た『華果成就御書』がある。道善房の遷化に際し、先に『報恩抄』二巻が送られているが、此の書はその三回忌菩提の意味もこめられて、記されたものの如くである。「日蓮が法華經を弘むる功德は必ず道善房の身に帰すべし<sup>②3</sup>」とある如く、旧師に対する追善回向の念を持って、筆を執られている。浄顯・義浄の兩名は、清澄における旧知の理解者であり、忘れる事のできない人々であつた。

### 三 弘安元年の初夏（五月から六月まで）

五月に入ると先ず一日付で妙法尼への御返事が、又三日付で窪尼への御返事がしたためられている。妙法尼からは干飯一斗・古酒一筒・ちまき・あうざし（青妙）・たかな（筍）等の御供養があり、窪尼からは標五把・箒十本・千日ひとつ等のそれぞれ季節に因んだ御供養の品が届けられたのに対する御礼状である。妙法尼と窪尼とは共に詳しい伝記が知られていないが、窪尼の場合は松野六郎左衛門の妻で、持妙尼のことだと云われ、又一説には西山の大内氏の妻であろうとも伝えられている。窪と云うのはその地名をとったものと思われる。ところで窪尼宛の書簡の中に「あつわらの事」に関する記述がある。『録外考文』<sup>24</sup>によると「弘安元年五月三日書」とあるが、△熱原法難▽の一件を指すものとすれば、弘安三年の執筆と云うことになる。尚、佐渡にあっても「虚御教書」によって迫害を受けたことを明らかにしている。

さて、此の頃は身延も五月雨が毎日降り続いたようである。窪尼宛の御書にも又五月廿二日付の『雨霖御書』の中にも、山中の長雨について「つれづれ申すばかり候はず」とある。西谷の山深く路しげき中に在って、雨霖の草庵に読誦・解説・書写の明け暮れと、檀越から寄せられた届け物に対する御礼をこめた教化の御書が、書き続けられている。そうした中で五月廿四日には、南条殿女房から「八木二俵」<sup>27</sup>が送られて来た。「度々御志難申尽候」とあるので、南条氏の御供養についての頻度がわかる。又この頃、兵衛志殿に宛られた御返事を見ることが出来る。真蹟七紙であるが前半の諸所に欠文があるが、錢十余連と其の他の品物を農事の多忙な時季に送ってよこしたことに關する御礼状である。供養の功德を、徳勝童子の故事によせて説き、更に兄弟共に仲よく親子三人法華経に帰依し、親類までも救う人となったことを賞している。池上親子・兄弟が一時信仰上の問題で対立したが、最後は円満に解決したこ



とを悦んでいる。その末文に「此事は一代聖教を引いて百千まいにかくとも、つくべしとはをもはねども、やせやま  
いと申し、身もくるしく候へば、事々申さず。」<sup>(28)</sup>とあることからみて、△やせ病▽にかかり身も苦しい状態であった  
ことがわかる。思うに五月雨の連日注ぐ山中にあって西谷の湿気が多い庵室での生活には、病身の回復も又日時を要  
したことであったろう。その病身を押し筆を執られ、檀越の身の上を案じられた宗祖の心中を察する時、慈愛の深  
さを感じることができろ。

六月三日付の『阿仏房御返事』にも、「既受<sup>レ</sup>生<sup>レ</sup>齡及<sup>レ</sup>三六旬<sup>一</sup>。老又無<sup>レ</sup>疑<sup>ヒ</sup>。只所<sup>ハ</sup>残<sup>レ</sup>病死<sup>ニ</sup>二句而已。然而自<sup>レ</sup>正月<sup>一</sup>至<sup>レ</sup>  
今月六月一日<sup>一</sup>連連此病無<sup>レ</sup>息。死事無<sup>レ</sup>疑者歟。」<sup>(29)</sup>とあって、止むことのなき此の病に死の疑いを抱くまでに至ってい  
るのである。佐渡の雪深き島から引き続いて山深き身延に入られた宗祖の身の上に、健康上の変化が現れ出して来た  
のである。此の年は又一般世間でも疫病が流行していたようである。六月二十五日付の『日女御前御返事』によると  
「今日日本の者去年今年の疫病と、去<sup>ス</sup>正嘉の疫病とは人王始<sup>マ</sup>て九十余代に並びなき疫病也。」<sup>(30)</sup>とあるによつて知れる。  
日女御前は建治三年八月にも、本尊供養のための奉納があったが、今回は法華経供養として御布施七貫文が送られて  
来ている。「此功德をもてる人一閻浮提の内に有るべしや」と賞している。<sup>(31)</sup>

その翌二十六日には『富木入道殿御返事』が記されている。これは四条金吾にたくして富木・太田の両入道が施物  
を送られたことに對する返信であるが、正文は当時流行の疫病(身の病)をとりあげ、身の病よりも心の病を取りの  
ぞくことの重要性を強調している。更に法華経の本迹二門について相違を論じ「例せば爾前と法華経との違目よりも  
猶相違あり」<sup>(32)</sup>とし、本迹相對を論じている。これはやがて天台の迹門中心による△理の一念三千▽と、宗祖の本門を  
中心とする△事の一念三千▽との相違につながり、「天地はるかに殊也」と云う末文への導入となっている。教えが

勝れる故に三障四魔も又一としをまさりたるものとして現れて来たことを指摘している。

ところで、この同じ日（廿六日）に『中務左衛門尉殿御返事』と、『兵衛志殿御返事』とが記されている。此の二編もやはり病に關する記述が見られる。前者は「夫人に二病あり<sup>33</sup>」として、身と心の病について論じ、富木入道宛の前掲御書と同じ書き方を用いられている。但し、「日蓮が下痢去年十二月卅日事起り、今年六月三日・四日、日々に度をまし月々に倍増す。定業かと存する処に貴辺の良薬を服してより已来、日々月々に減じて今百分の一となれり。」とあって、発病から今日までの症状が、やや具体的に記されている。慢性の腸炎かとも思えるが、教主積尊が貴辺の身に入り替って「日蓮を扶け給ふか。」と薬品を送り届けてくれたことに對し、感謝の意を表している。此の文面からも四糸氏は医薬に關して、相当の知識を持っていたのではないか、と考えられている。兵衛志殿宛の御返事には、「はらのけ（下痢）はさゝもん殿の御薬になをりて候<sup>34</sup>」とあり、薬効のあったことが記されており、更に送られて来た味噌をなめたことよって、「いよいよ心ちなをり候ぬ」と述べている。宗祖の健康状態が此の二書の上からもある程度理解できよう。

翌二十七日には窪尼から種々の御供養があつた。此の人は先に（五月）も御供養の品を届けて来ているが、御書の中では弘安年中に入ってから登場して来る人である。「御信心のね（根）のふかく、いさぎよき玉の心のうちにわたらせ給ふ歟。たうとしたうとし<sup>35</sup>」とあるのでもわかるように、篤信の尼御前としてこの頃の宗祖に深く帰依していた門下の一人であつた。

#### 四 弘安元年の夏（七月から八月まで）

身延の沢にも夏の日射しが濃くなって来た頃、妙法尼から法華經についての不審な点について尋ねてきた。これに

対して宗祖は、七月三日付で御返事を書かれている。即ち、宝塔品の「六難九易」を挙げ、法華經受持の功德を説き更に題目を唱える計りで仏に成ることの不思議につき、妙法題目の意義を明らかにして、「法華經一部の肝心は南無妙法蓮華經の題目にて候」<sup>36</sup>とし、この題目によって十界ともに即身成仏をうることができると示している。

七月七日には「種種物御消息」二紙<sup>37</sup>（断）が記されている。日興の写本があり、「駿河と甲斐とのさかいは山たかく、河ふかく、石をつく、みちせばし」と文中に見られるので、駿河方面の人と与えられたものとも考えられる。又雨が降り続いて河は三か月にわたって増水し、山崩れや道路の欠壊などで、人もかよはず、糧もたえて乏しい状態であったことがわかる。こうした中に、その翌日上野時光から「麦のしろきこめ一駄」と、「はじかみ」とが送られて来た。阿那律・迦葉の故事を述べたあとで「今年は疫病と申し、飢渴と申し、とひくる人々もすくなし。たとひ病なくとも飢えて死事うたがひなかるべきに、麦の御とぶらひ金にもすぎ、珠にもこえたり。」<sup>38</sup>と感謝している。これらの事から当時は天候異変により、長雨・疫病・飢渴と続いて、入山当初の状態と等しい様相を呈していたことがわかる。西谷の生活も又、安易なものではなかったようである。

十四日には先きの妙法尼から西谷へ、夫が亡くなった時の模様を知らせる便りが到着し、それに対する御返事が記されている。特に尼の夫の唱題成仏を挙げ、尼の即身成仏にもつながるものとしている。<sup>39</sup>檀越の悲報に接しては、心情をこめた深悼の書簡が送られ、遺族を慰め勵まして、更に法華信仰への道を教示されているのである。事情さえ許せば早速弔問して、尼を始め一門の人々にも会って追善回向を、と考えられたことであろうが、そうした心情を筆にたくして、書き上げられているのである。遺族にとってこうした書簡が、どれ程心の支えとなったかは測りしれないものであったろう。

さて、二十七日には佐渡の阿仏房が、はるばる身延山へ三度目の登山をして来た。その折り七月六日付の千日尼の手紙を持参して来たが、この返事を二十八日付で記している。千日尼が女人成仏について述べた事をとりあげ、法華經の女人成仏を論じ、更に尼が父の十三回忌追善のための御供養を讃している。在島三年間の外護者であった阿仏房夫妻の宗祖に対する心情も又深いものがあり、身延入山五年間に三度も登山している。「大地よりもあつく、大海よりもふかき御心ざしぞかし」<sup>(40)</sup>と宗祖も感激し、手元の法華經十巻を阿仏房にたくして贈り届けている。「日蓮がこいしくをせせん時は学乗房によませて御ちやうもんあるべし。」と記している。学乗房は元真言宗であったが、佐渡に於て改宗し宗祖の門下となった人であり、一の谷入道の一族であると伝えられている。宗祖を慕う檀越門下に対する暖かい心使いが窺えよう。佐渡から身延への旅程は安易な業ではない。阿仏房を見つけた時の宗祖は「尼ごせんはいかに」と安否を問い、無事の様子を知って「盲目の者の眼のあきたる」心地がしたと悦んでいるのをみても、宗祖の心情を汲みとることができる。

八月に入ると十一日付で、北条氏の一門と云われている北条弥源太入道に宛た消息文がある。これは入道が身延を訪ずれ、帰宅してから使者に持たせて寄こした情報の返事である。それによると、鎌倉建長寺の道隆が死んだことに関するものであった。即ち道隆が死んで舍利となったと云う噂が広まった<sup>(41)</sup>。これは道隆の弟子達が、道隆の成仏したことを証するものとして云いふらした誑言であり、更に「日蓮房が存知の法門を人に疎ませんとこそたばかりて」<sup>(42)</sup>おこなった虚言であると批判を下して、いまに必ず根が現れて真実がわかる時が来るであろうと述べている。宗祖が身延へ入山されたのち、鎌倉では念仏一門の徒が、機会をみては巻き返しを計っていたらしく、政治的な結びつきをもって現れたり、又は誑惑によって世人の風潮を煽るなどの手段がとられていたようである。熱原法難や此の書に見ら

れる道隆の舍利に関する一件が、これを物語っているものと云えよう。西谷の草庵に在っても、常にこうした情報を察知し、鎌倉を始め富士・中山方面に散在する門下に対し、適切な指示が与えられていたのである。即ち身は山林に交るといえども、広い視野に立って世を眺め、門下の在り方を教示されていたのである。

八月も中旬に入って、暑さもそろそろ峠をこえる頃辛一駄・はじかみ五十把が送られて来た。届け主は不明であるが、御礼状の真蹟二紙が富士の大石寺に所蔵されている点や、辛一駄とはじかみ五十把と云う点から、いづれ富士方面駿河からのものと考えられる。十四日付で御返事の御礼状が記されている。

「このみのぶのやまと申し候は、西はしらねの嶽、つねに雪をみる。東にはてんしの嶽、つねに日をみる。北は身延の嶽、南はたかとの嶽、四山の間、箱のそこのごとし。戊亥のすみより河ながれて、辰巳のすみむかう。」と身延の位置を示しているので、相手はまだ身延山の地理について詳しく知らない人のようでもある。又「かかるいみじきところ」と云っているので、宗祖の身延に対する心持が窺える。入山当初すでに「大いしはこの山中心中に叶て候へば」と述べている如く、身延に対する心が深く働いたようであるが、ここでは「いみじきところ」と云うように表現が変り、次第に身延を「尊い山」・「霊山」であると云う考え方に移行をしていく過程の一段階をみる事ができえよう。

〔註〕

① 実相寺御書 昭和定本遺文 一四三五頁

② 「四十九院等事。彼別当等無智者間、向、日蓮、恐、之、小田一房等為、怨、歎」(実相寺御書一四三五頁)

③ 松野尼御前御返事 一四三六頁

④ 四糸金吾殿御書 一四三六頁

- ⑤ 同 一四三八頁
- ⑥ 松野殿御返事 一四四二頁
- ⑦ 同 一四四三頁
- ⑧ 三沢小次郎については「淡州人、移駿州富士郡大鹿村」、富士十七騎之一、延慶二年五月十八日没、云云」(高祖年譜攷異・下三〇)とある。(日蓮上人伝記集一五九)
- ⑨ 三沢 鈔 一四四六頁
- ⑩ 高祖年譜(四四)、然し此の時、宗祖は病身であった。
- ⑪ 三沢 鈔 一四四七頁
- ⑫ 上野殿御返事 一四五一頁
- ⑬ 始開仏乘義 一四五四頁
- ⑭ 「弘安元年大藏戊寅建治四年二月二十九日、改元。疫病、故歟。」(弘安改元事 一四五四頁)
- ⑮ 諸人御返事 一四七九頁
- ⑯ 教行証御書 一四八七頁
- ⑰ 上野殿御返事 一四九〇頁
- ⑱ 同 一四九二頁
- ⑲ 「一切経の中に此寿量品ましまさずば天無、日月、因無、天王山河無、珠、人にたましいのなからんがごとくしてあるべき云云」(開目抄 五七六頁)
- ⑳ 檜越某御返事 一四九三頁
- ㉑ 是日尼御書 一四九四頁
- ㉒ 大田左衛門尉御返事 一四九六頁
- ㉓ 華果成就御書 一五〇〇頁
- ㉔ 窪尼御前御返事 一五〇二頁
- ㉕ 「録外考文」(卷二一五)
- ㉖ 霖雨御書 一五〇四頁
- ㉗ 南条殿女房御返事 一五〇四頁
- ㉘ 兵衛志殿御返事 一五〇七頁
- ㉙ 阿仏房御返事 一五〇八頁
- ㉚ 日女御前御返事 一五一二頁

- ③① 同 一五一六頁
- ③② 富木入道殿御返事 一五一八頁
- ③③ 中務左衛門尉殿御返事 一五二三頁
- ③④ 兵衛志殿御返事 一五二五頁
- ③⑤ 窪尼御前御返事 一五二五頁
- ③⑥ 妙法尼御前御返事 一五二七頁
- ③⑦ 種植物御消息 一五三一頁
- ③⑧ 時光殿御返事 一五三四頁
- ③⑨ 妙法尼御前御返事 一五三七頁
- ④⑩ 千日尼御前御返事 一五四六頁
- ④⑪ 『高祖年譜攷異』には、「得五色舍利」(三二)とある。
- ④⑫ 弥源太入道殿御消息 一五四九頁
- ④⑬ 芋一駄御書 一五五〇頁
- ④⑭ 富木殿御書 八〇九頁

△付記▽

本稿は、『楼神』に「身延山における日蓮聖人」と云うテーマで、連載中の内の一稿である。